

平成 30 年 5 月 29 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03033

研究課題名(和文) 生き方の分化・再編と交渉に関する対照民族誌的研究：韓国社会の事例を中心に

研究課題名(英文) Contrastive Ethnography of South Koreans' Ways of Life in Divide/Reconfiguration and Negotiation

研究代表者

本田 洋 (HONDA, Hiroshi)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：50262093

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、今日の韓国社会に暮らす人びとの多様な生活経験を相互に、かつ過去の生活経験と比較対照することを通じて、生き方の分化・再編と交渉について微視的かつ多面的な分析を試みた。特に農村移住者、カトリック教会、ならびに脱北者に焦点を合わせ、民族誌的資料の収集と対照民族誌的分析を行うことにより、流動的・創発的な共同性と関係性の諸様態に見られる共通性と多様性、ならびにそれを条件づける諸要因、宗教的諸活動が生き方の構想ならびに実践と切り結ぶ関係の諸様相と、それを条件づける諸要因を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research project, we have sophisticated microscopic-cum-multifaceted analysis on South Koreans' ways of life in divide/reconfiguration and negotiation. The method of contrastive ethnography adopted here is to compare contrastively differentiated and complicated life experiences by the residents in contemporary South Korean society with each other as well as with their experiences in the near past. Our ethnographic focus is on postindustrial urban-to-rural migrants, Catholic Christians and refugees from North Korea. As a result, we have analytically shown variations as well as common traits observed among Koreans' modes of fluid and emergent communality and social relations. We have also examined ways of life inspired by and inspiring religious practices.

研究分野：文化人類学，韓国朝鮮研究

キーワード：対照民族誌 韓国 農村移住 カトリック教会 脱北者 北朝鮮 コミュニティ 生き方

### 1. 研究開始当初の背景

韓国社会の対照民族誌的研究を試みようとした背景として、人類学者の立ち位置によって少なからず乖離が見られるようになったフィールドでの経験とそれに基づくフィールド認識の架橋的理解、多様な形式と内容をとる民族誌資料の架橋的かつ総合的理解の必要性が挙げられる。

### 2. 研究の目的

この研究の目的は、韓国社会に暮らす人たちの生き方の分化・再編と交渉について、フィールドワークの成果に留まらない多様な民族誌資料の収集と相互対照を通じて、個別の民族誌事例の独自性と普遍性をより厳密に同定しつつ、微視的かつ総合的な理解を深化させることにあった。

### 3. 研究の方法

(1) 韓国社会に暮らす人たちの生き方の分化・再編と交渉について、流動的・創発的な共同性と関係性、ならびに宗教活動への参与に焦点を合わせた現地調査と民族誌資料の収集、調査・収集した諸事例の対照民族誌的考察の2段階に分けて研究を進めた。

(2) 研究代表者・分担者・連携研究者がそれぞれ 帰農者関連の諸事例の調査・収集と再分析、プロテスタント、カトリック諸教会についての調査・資料収集と再分析、脱北者の生活史記録の再分析を担当し、相互に協力しつつ諸事例の整理・分析にあたった。

### 4. 研究成果

#### (1) 農村移住者の生き方(本田)

韓国では1990年代後半以降、農村と農業の再発見と資源化が多様な行為主体によってなされるようになった。この分担課題では、本田が2000年代後半から韓国智異山麓山内地域で収集してきた農村移住者の事例に基づき、農業と農村の再発見の意味とその暫定的結果を明らかにするとともに、韓国農村・地域社会の民族誌的研究の再構成に向けて、記述と分析の枠組みの再検討を試みた。

この地域では1990年代後半から「インドゥラマン生命共同体」(インドゥラマン運動)と称する多分野にわたる代案的社会・文化・生活運動の諸活動を通じて都市からの移住者が増加し、さらに初期移住者によって形成された社会ネットワーク、ならびに基盤施設と生活環境に基づき、2000年代中盤以後、多様な移住と生の営みが展開されてきた。彼らの生の営みと地域社会への参与を、教育・学習と社会参与、および、経済活動に焦点を合わせて整理すれば次の通りである。

各自の嗜好と学習意欲に合わせた多様な学習が可能となるプログラムと新たな学習の場が随時形成される条件がこの地域には整備されており、このような教育・学習と社会参与の場の醸成が、移住者社会の形成と

相互触発的に展開されてきた。しかし、このような学びの内容の相当部分を占めるのは、地域の外から導入された知識や技術である。移住者たちは農村の生態・生活環境を自身の生き方に照らし合わせて再解釈し、それを基盤として新たな資源を作りながら、このような外来の知識と技術に基づく「美しい生き方」、「生態代案共同体」、あるいは「循環経済」を試みようとしている。

経済活動を通じた地域社会への参与はより限定的である。小農的専業農を志向する狭義の「帰農者」たちは、程度の違いはあるものの概ね環境親和的な農事を試みているが、自然・有機農法の理想のみを追求するのではなく、状況に応じて現実的な方法を模索する側面も見られる。農業以外に地域経済と関連する経済活動としては、食堂・カフェ、親環境売場、建築協同組合、民泊・ペンション、マウル事業等を挙げることができる。そこでは概して旧住民主体に編成された既存の経済活動への参与よりも、都市住民に直節・間接的に連結された独自の経済網の形成が目立つ。なかにはマウル事業のように移住者たちが旧住民とのかかわりで積極的な役割を担う例も一部に見られるが、旧住民の主生業である農業で主導的な役割を担う例はほとんど見られない。

以上の事例にも表れているように、韓国農村社会の現実を、小規模自営農を基盤とした家族の再生産と村落という場での相互扶助と協同の再生産という旧来の枠組みで捕捉することはもはや難しい状況にある。この分担課題では、農村移住者個人個人の生の様式と実践に焦点を合わせ、このような農村の再発見と資源化の複合的構成、ならびにそれを流用した生き方の流動的性と暫定性を明らかにした。それとともに、同じ空間に混在する諸行為主体が集団的に形成する社会的諸領域(既存の農村村落や山内の帰農帰村者の「共同体」)の再生産と相互連関についても、接近方法の再検討を試みた。このような状況は、農村での生の実践において再発見された諸資源の客観的構成と配置(アクセス)、ならびに諸行為主体によるその意味付けという、「農村性」(rurality)の客観的ならびに相互主観的な構築の弁証法的関係を一方で示している。しかし他方では、農村と都市の区別を越えた同時代的な現象としても展開しており、農村性(ならびにそれと相互規定的・相互浸透的に構築される都市性)の枠組みを越えた比較・対照を通じて、探求をより深めていくことも求められている。

#### (2) プロテスタントとカトリック(秀村)

秀村が担当したこの分担課題は、韓国社会で大きな影響力を持ってきたキリスト教について、プロテスタント教会とカトリック教会を対照させることによって、その社会文化的問題をより明確にさせようとするものであった。1960年代からの高度経済成長とともに

に韓国のプロテスタント教会は信者数の増加という急成長をとげたが、1990年代に入ると信者数の増加は鈍り減少局面を迎えた。それとは逆に、1990年代に入るとカトリック教会が信者数を伸ばしはじめ、2010年代までに信者数を倍増させた。この対照的な成長を見せたキリスト教を対象として、秀村はプロテスタント教会については3つの教会を中心に継続的な調査研究を行ってきた。今回の分担課題では、慶尚北道漆谷郡倭館邑所在の倭館聖堂（カトリック教会）を中心として調査研究をおこない、これまでに得たプロテスタント教会の事例との対照を試みた。なお倭館地域はカトリック信者の割合が人口の10%近くを占め、全国平均の2倍の値を示している。

高度経済成長を成し遂げて豊かな社会となった1990年代にプロテスタント教会の信者数の増加が止まったのは韓国社会が持っていた競争的な原理が鈍化し始めたことと関連して考えられるであろう。韓国のプロテスタント教会は多くの教団に分裂し、また同じ教団にあっても個別教会の独立性が高く、信者獲得においては互いに競争関係にあった。この競争原理は企業が持つ競争原理と類似していて、量的な成長が恩恵の証とされる一種の成果主義をエンジンとして、競い合っただけで信者数を増加させていった。この意味でプロテスタント教会の存在は、豊かさを目指して競争をする社会や個人の生き方に適合的だったと言うことが出来よう。

これに対し、1997年末からのアジア金融危機（IMF危機）は韓国社会を一変させた。大規模な構造改革による企業の再編により、それまでの努力すれば報われるという希望が果たせないと感じる人々が増え、実際にも財閥系企業と中小企業との差は顕著となった。経済的な格差による閉塞感のためにそれまでの経済成長重視だった人々の考え方にも変化が現れる。豊かさを求めてきた社会での生き方の規範に対する懐疑が様々な側面で見られるようになったのである。

この動きに比例するかのように、カトリック教会の信者数は増加していく。それまでのプロテスタント教会では、教会堂建築と信者獲得のための競争が様々な問題を起こしており批判を招いていた。それに対してカトリック教会は、地域の信者数に応じて教会（聖堂）を配置しているために、教会や司祭間の競争はあまり起こらない。そのために資源を信者数の増加を目指す教会成長のためよりも、社会福祉などの活動に回ることが可能であった。そのような活動と、この世を捨てた存在である神父たちの存在は競争に疑問を感じた人々の共感を得て信者数を伸ばしていったとも考えられる。

このような背景を考慮しつつ、倭館地域のカトリック教会（聖堂）での調査研究をおこない、いくつかの特徴を見いだした。地域社会とカトリック教会の関係は、信者数が住民の1割を占めることから影響力の大きさが窺

えるのだが、それ以上の力を持っているようである。それはこの地域の学校教育をカトリック教会が運営する学校が担ってきたことにもみられる。1932年に設立された小花女子学院は、男性優位の社会における女子教育の期待を担って生徒数を伸ばしていった。植民地解放以後は純心教育財団を設立して純心初級中学校、後に高等学校を設立しており、現在は男子校の純心中学校、純心高等学校、女子校の純心女子中高等学校となっており倭館地域では唯一の高等学校でもある。

地域社会においても純心の同窓生が重きを占めており、官公庁から一般企業までを含めた地域社会が卒業生のネットワークで覆われている。在学中にカトリックの教義に触れて信仰を持った信者も多いため、聖堂の信者に占める卒業生の割合も大きい。教育財団を運営しているのは大邱教区ではなく聖ベネディクト修道会倭館修道院であり、倭館地域の5つの聖堂の司祭も大邱教区からではなく修道院から派遣されている。そのため聖堂、修道院、学校が重層した関係をなしている。

倭館地域のカトリック教会を特徴づけているのがこの修道院の存在である。朝鮮戦争までは現在の北朝鮮元山にあったドイツのベネディクト修道会によって設立された修道院が朝鮮戦争後に倭館に移転してきた。この修道院は自活のために様々な事業をおこなうのが特徴でドイツ人の修道士たちによって様々な事業がおこなわれていた。その事業所が農村地帯であった倭館での重要な雇用先ともなった。信者だけでなく非信者も雇用されたので、地域社会と修道院、聖堂の関係が雇用の面においても密とされた。

また聖堂は単に宗教の場だけではなく、カトリック教会が持っている人々の生活の支援の場でもあった。その一つが聖堂から始まったマイクロ・ファイナンス運動である。1967年に倭館信用協同組合は聖堂に事務所をおいて始まり、庶民金融機関として聖堂の信用を背景としながら発展をしていく。独自の社屋をかまえた現在でも聖堂とは深い関係にあり、2017年におこなわれた設立50周年記念式は聖堂でおこなわれた。

このような点を踏まえてプロテスタント教会とカトリック教会の民族誌的対照研究としては以下のような点が問題として考えられる。教会の創立からの歴史（教会のライフヒストリー）、教会組織、教会や信者と聖職者である牧師や神父の関係、教会と地域社会の関係、信者の信仰態度、祖先祭祀をはじめとする伝統文化との関係などである。韓国社会でおおきな影響力を持つキリスト教の二つの教会を対照的に捉えることによって、韓国社会や文化伝統をより深く理解することが可能となるであろう。

### (3) 脱北者の生活史から（伊藤）

韓国社会と北朝鮮社会の対照民族誌的な考察として、韓国側では伊藤自身が取り組ん

できた全羅南道珍島郡臨涯面の上萬，北朝鮮側では脱北者による情報が得られる咸鏡北道セピョル郡（旧慶源郡）の農圃里を取り上げる。両者は朝鮮半島の最北端と最南端に位置して，生業に直結する気候の点では大きく異なるが，どちらももともと水稲と畑作を併用してきた点，日本統治下において珍島では入り江の干拓事業，セピョル郡では豆満江沿岸の干拓事業により広大な水稲耕作圃場を開墾してきた点で共通する。ただし珍島でも上萬里は，干拓地を持たずに貯水池による水利事業によって農業振興を図ってきた点では郡内沿海部の農村と異なる。

植民地統治下の北朝鮮では鉱工業・化学工業・水力電力への大規模な投資・開発が進められ，工業化において農業為主の朝鮮半島南部とは異なる様相も顕著だった。当時のセピョル郡は帝国日本内でも近代的な石油コンビナートの生産拠点として知られた。また日本の植民地経営および満州経営戦略の拠点であった大都市清津の建設と発展の影響が大きく，その農産物供給地として郡内の農業基盤の開発も進められた。とりわけ豆満江の整備にともなう川沿の広大な水稲地帯の干拓は北朝鮮でも有数のものであった。これに比べると，上萬では集落の立地も規模も過去100年間を通して格段の変化を見ないが，日本統治下においては，植民地行政の支援のもとで農村振興会および水利契などの協同組織による農村振興が図られた。

解放後に両者が歩んだ変化はさらに対照的であった。セピョル郡農圃里では，社会主義の中央政府主導による計画経済体制と協同経営化により農業の協同組合化が，さらに協同農場化にともない党の指導管理のもとで在来の農作業と集落の改変が進められ，集落の集中化と外部からの労働力移入によって集落の規模拡大が進んだ。政府の統制下での計画経済体制による労働配分（職業・職場の固定化）と党・行政幹部による経営・物資供給業務の独占にともない，一般農民は移住や訪問に対する強い規制を受けることになった。一方，政治的な指導・統制・処分の一環としての移住・移動として，集団的な労働配分や職場変更（強制配定・強制移住）が行われ，鉸山地区，北部高地や農村への住民移住が見られた。農圃においても都市や労働者区からのこうした強制移住が見られ，政治的な理由による場合には移住後も監視下におかれる。基本的に北朝鮮の農村（協同農場）では強制移住者による人口補充以外には住民の定着・固定が顕著である。一方，韓国農村では基本的に居住も職業選択も自由であるため，都市部の経済的機会の増加に伴う，あるいは社会的上昇の手がかりとして有利な教育機会を求めた人口流出が，全国的にみても顕著であった。とりわけセマウル運動は，都市を中心とする生活様式を農村にも提示することで，いわば新たな国民形成の運動としての性格を帯びるに至り，農民の多くが最

も安易な選択肢として，都市部に移住する道を選び，農村の過疎化と高齢化に拍車を加えた。

つまり，社会体制の差による住民の生活世界に基本的な差がみられるが，北朝鮮においても公式制度の下で党による厳しい指導管理体制のもと，非公式な手法による人口流動が見られ，公式の生活保障が機能しない状況において，非公式な人的関係と交渉による移動・移住が生活自衛上も欠かせない状況がみられる。公式の制度的な規制が強く働く中でも，住民の基本的な生活防衛上の非公式な行動を規制するには限界があり，規制・拘束の下でも潜在的な移動・移住に対する欲望は高いとみるべきであろう。

社会主義制度の機能不全が住民の生活にも様々な形で深刻な影響を及ぼすとともに，堅固な公式体制の装いの下で非公式な手法はやむを得ない実践として是認されており，さらに危機的な状況では移動・移住は違法な渡航や流民化の様相を採っている。非公式手法として報告されているものは，かつて韓国社会でも広く行われていた個人的人脈を介した不正蓄財や特権供与と基本的に変わりなく，韓国・朝鮮社会に根を下ろした属人主義（personalism）である。今後の北朝鮮社会が国際的な人道的基準を配慮した後社会主義的な体制に移行するならば，政権によって導入された社会主義という非人格的な制度のもとで非公式化されてきた属人的な関係と行動が公認されることで，この社会と住民制度が活性化することが予測される。

北朝鮮社会において権限が集中する党員および党幹部を目指す競争は熾烈であり，その点では韓国に劣らぬ競争社会である。また限られた人脈の中で家族と近親関係は最も信頼できる関係であるが，とりわけ北朝鮮では生活危機状況のもとで家族との紐帯は韓国社会以上のものである。その一方で，職場における集団主義の規範は，食生活まで脅かされる危機的状況の下では，末端組織部では生活防衛のための非公式的行動を集団で採ることで，運命共同ともいえる連帯ともなることが報告され，属人的な人脈による私的利益追求の競争の一方で集団主義的な生活防衛も採られる点に特徴がある。属人主義とこうした集団主義的な連帯との共存する状況については，韓国社会についても非現実的とは言えない。また，非人格的な制度による保障が充実してきた韓国社会においても，社会全体として競争体制の深刻さが指摘される中で，属人的な関係と目的達成の遂行の非公式の駆け引きについては，脱北者に対して試みたインタビューや手記による記述と分析が有効と思われる。

北朝鮮社会と韓国社会は，対照的ともいえる公式体制の下で，人々の生活現実と行動面では基本的に共通する社会文化伝統を念頭においた民族誌的な対照が有効と思われる。

#### (4) 対照民族誌的分析法の成果と可能性

分担課題における対照民族誌的分析においては、農村移住者と地元民主体の農村・地域社会、プロテスタント教会とカトリック教会、北朝鮮の農村と韓国の農村の比較対照から、個別の民族誌的テーマに対する接近・視角の再考がなされたが、この3つの成果をさらに比較対照することによって、今日の韓国社会に暮らす人びとの生き方の分化・再編と交渉についての微視的かつ多面的な分析が可能となった。

特に農村移住者と脱北者の事例にカトリック修道院の事例を加えて比較対照することにより、生活の必要性や欲望の充足を契機として生成する創発的な共同性が、一方で国家・行政や宗教の制度と、他方で既存の社会組織と切り結ぶ関係について、分析的かつ動態的に捉える枠組みを洗練させることができた。また、プロテスタント教会やカトリック修道院の事例と農村移住者の事例を対照することにより、理想的な生き方の追求が、単に個人の審美的充足や閉鎖的な共同体内での調和的な人間関係の形成を意味するものとしてではなく、より普遍性の高い理念、経済的ナショナリズムとそれへの反省、ならびに市民的公共性との関連で捉えられるべきであることが明らかになった。そしてこのような生き方において宗教活動が持つ意味合いとして、必ずしも霊的な救済のみを志向するものではなく、現実の生活世界におけるより望ましい生き方の指針となり、その追求を促進かつ正当化するものとして作用していることが明らかになった。

資料収集の方法を再検討しつつ比較対照の軸をより創造的に設定することにより、本研究で試みた対照民族誌手法を、単に発見的な(heuristic)道具としてだけでなく、巨視的な政治経済的脈絡、あるいは歴史的脈絡との相互性の下に展開されるフィールドの人びとの行為主体性(agency)を現場の脈絡からより微視的かつ多面的に分析することを可能にする方法としても洗練させてゆくことが可能となる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

##### 〔雑誌論文〕(計7件)

本田 洋, 序 制度と個人(あるいは行為者), 韓国朝鮮の文化と社会, 査読有, 16, 2017, pp.7-25

伊藤亜人, 北朝鮮における社会主義体制と非公式領域 社会制度と属人主義の観点から, 韓国朝鮮の文化と社会, 査読有, 16, 2017, pp.93-119

HONDA, Hiroshi, Internationalization as Multi-lingual Academic Practice, Japanese Review of Cultural Anthropology, 査読有, 17(2), 2016, pp.57-64

秀村 健二, 韓国キリスト教会における生き方の変化: プロテスタントとカトリックという生き方をめぐって, 韓国朝鮮文化研究, 査読無, 15, pp.29-39

本田 洋, 韓国山内地域の農村移住者と生活経験: 2010年代前半の動向を中心に, 韓国朝鮮文化研究, 査読無, 15, 2016, pp.41-66

HONDA, Hiroshi, Social Anthropology of Korea in Japan after the 1980s, Japanese Review of Cultural Anthropology, 査読有, 16, 2015, pp.181-192

##### 〔学会発表〕(計6件)

本田 洋, 農村移住を契機とした生の転換: 韓国農村民族誌を超えて(韓国語), 韓国文化人類学会60周年記念大会(国際学会), 2018

本田 洋, 日本における韓国人類学: コミュニティ研究と歴史民族誌的接近を中心に(韓国語), 韓国文化人類学会2017年秋国際学術大会(国際学会), 2017

本田 洋, 日本の人類学における韓国地域社会研究と歴史人類学的接近(韓国語), Global Korean Studies and Writing Korean Culture(国際学会), 2017

HONDA, Hiroshi, Internationalization as Multi-lingual Academic Practice, The 3rd International Symposium, "Internationalization/Globalization of Anthropology in East Asia: Part 1 Korea and Japan", 2016

##### 〔図書〕(計3件)

伊藤 亜人, 弘文堂, 北朝鮮人民の生活: 脱北者の手記から読み解く実相, 2017, 456

本田 洋, 風響社, 韓国農村社会の歴史民族誌: 産業化過程でのフィールドワーク再考, 2016, 486

磯崎 典世・李 鍾久編, 本田 洋 他, 東京大学出版会, 日韓関係史 1965-2015 III 社会・文化, 2015, 423-445

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

本田 洋 (HONDA, Hiroshi)

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号: 50262093

##### (2) 研究分担者

秀村 研二 (HIDEMURA, Kenji)

明星大学・人文学部・教授

研究者番号: 60218724

##### (3) 連携研究者

伊藤 亜人 (ITO, Abito)

東京大学・大学院総合文化研究所・名誉教授

研究者番号: 50012464